

虹の向こうの幼き日の思い出

山形県 大滝 寿満子

はじめに

毎年八月を迎えると、そのことが恒例であるかのごとくに、テレビをはじめとして新聞・雑誌などに過去の戦争に関するいろいろな報道や記事が、私たちの目や耳に入ってくる。私の年代から以前の人々にとっては、大なり小なり苦労の程度に差はあっても、何らかの形で労苦を体験している。この年齢になってくると、戦中・戦後の遠いことはだんだんと記憶も薄れてくるのだが、しかし決して忘れてはならない事実でもある。

一 私の生い立ち

私は、昭和九（一九三四）年六月六日に山形県酒田市で生まれ、生後五十日目に満州に渡った。父は山形県と秋田県との県境の吹浦村の出身である。吹浦の小学校を卒業して鶴岡の荘内中学校（現

在の山形県立南高等学校）に進学した父は、音楽が好きで同好の友人たちとグループを作り、歌ったりハーモニカ演奏をしたりしていた。中学校を卒業したら東京に出て音楽学校に入り、音楽で身を立てるということが夢であったようだが、中学卒業前に自分で希望していた音楽学校を見に行ったら、自分の思っていたことと全く違っていたのでびっくりして、音楽学校進学について悩んでしまった。たまたま受験していた東京医科歯科大学に運良く合格してしまったので、そのまま歯科医の道を進むこととなった。大学を卒業して故郷に戻り、村で歯科医院を開業していた。

祖父は、吹浦村の村長をしていたが、そのころ現在の羽越本線の敷設工事が行われていて、多くの鉄道関係の人がこの寒村の吹浦村に入ってきて、村は大そうな賑わいを呈していた。その鉄道工事の監督という人が、我が家の離れに工事期間中寝起きをしていた。その人は鶴岡市の人で、祖父や父と毎日雑談を交わしているうちに、父の嫁取り

の話が出てきて、その人のお世話で鶴岡在住の娘とお見合いをし、祖父も父も大層乗り気になって結婚したとのことである。

母方の祖母は、「まだ、汽車も通っていない田舎に嫁に行くのか？」と、口ぐせのように言っては嘆いていたそうです。それが何と山形の田舎どころか、遙かに遠く「お国を離れ何百里……」と、軍歌にも歌われている満州に行くことになろうとは、当時の母にとっては夢にも思っていなかったことだろう。当然そのことを知った祖母は随分と悲しみ嘆いたことと思う。

両親の結婚は大正七（一九一八）年だと思うので、今からすれば大昔の話になってしまふ。

私が生まれるために母と姉三人が残り、一番上の兄と中間の姉を連れて父が渡満したのは、昭和八年の末ごろのことだと思ふ。その当時既に父の兄弟二人は、牡丹江とハルビンの中間の一面坡に行っていたので、それを頼って渡満を決心したらしいが、渡満の動機についての詳しいことはだれ

からも聞けなかった。最初は父も一面坡に行ったらしいが、そのうちに牡丹江に住むことを決心して土地も求めていた。

そのころの牡丹江には、まだ日本人も少なく市街の中心地に住居を建てることのできたらしい。その後数年が経って、居留する日本人も増えてきて新市街が整備され、我が家も牡丹江市円明街四―五に移転して家を新築した。

二 牡丹江での生活

牡丹江に新しい家が出来上がったころ、母と三人の姉と共に父の許に移った。父は、新築の自宅に齒科医院の看板を掛けて開業していた。

私は幼年時代をそこで何の生活の心配もなく、周囲の人々から慈しみ、育てられていた。昭和十六年四月に円明国民学校に入学したが、その年の十二月八日には大東亜戦争が勃発し、満州国も戦時体制一色となった。大戦が始まって一、二年が経つと、平穩だった牡丹江市の周辺にも関東軍の部隊が続々と増えて、軍関係や満州国政府各機関

の施設などの工事が活発化して、騒々しくなってきた。地下工事もあったらしい。後の話だが、その施設などは日本の敗戦後は中共軍が使用していて、秘密基地のようになっていたらしく、許可を受けずには牡丹江市内を旅することができなかったようだ。

そのように、周囲の環境は戦時色がだんだんと濃くなってきたが、それでも満州国内での一般人の日常生活は、比較的に変化が鈍く落ち着いていたように思う。

街中には関東軍の兵士があふれていたが、所在する部隊毎に休みの日が決められていたらしく、毎日どこかの部隊の兵士が休日を取り街中に外出していたので、それこそ四六時中カーキ色で埋まっていた。当時、父は山形県人会の会長をしていたので、山形県出身者は将校・兵士を問わず遊びにきていた。私たち家族も心から歓待し、いろいろと手を尽くして食料品を確保して、おはぎや汁粉、それに山形名物の山菜漬などを作ってはごち

そうしていたので、その人たちの友だちまでが誘い合って来て我が家の広間はまるで集会場のようになり、私たちが居る場所もなくなってしまうくらいだった。その代わり、私たち姉妹は遊び相手には事欠かなかった。兵士のだれかれとなく、トランプや碁将棋をして一日を楽しく過ごした。兵士たちも、楽しそうに満足して部隊に戻って行った。兵士の大部分は内地から満州に送られて、見ず知らずのここ牡丹江の部隊に配属になった人たちで、遠い故郷をしのんで、つかの間の家庭の雰囲気をおが家に求めて遊びにきていたのだろう。

あるとき、二、三軒隣にあった市場から火が出て、火の勢いがだんだんと強くなってきて風向きが我が家の方向に吹いてきたので、私たちはすぐに風上の安全地帯に避難させられたことがあった。どこまで走って行ったかよく覚えていないが、大分遠くまで逃げたようだった。我が家のほうは、遊びにきていた兵士たちや、近くにいた人たち大勢が消火にきてくれて、重たい物を母の部屋や二

階からも運び出してもらった。火は勢いを増して裏手にあった二軒の貸家にも延焼したが、幸いにもそのうちに風向きが突然に変わり、間一髪のところでは類焼を免れて無事だった。夜になって、ようやく鎮火したので家に戻ったが、私たちには当然我が家も焼け落ちているだろうと覚悟を決めていた。だが帰ってみると我が家は無事に残っていて、子供心にもそれまでの不安な気持ちがいっぺんにぬぐい去られて、家の中に入るとそのままへたへたと座り込んでしまった。周囲は、まだまだ残り火がばちばちと音を立てながら燃えくずぶつていて、眠たくても眠れなかった。

翌日になって片付けを始めたが、今度は兵士が数人かかっても、庭に下ろした重たい物を元の場所に運び入れることが困難だった。よく言われるように、「火事場のばか力」だったのだろうと、兵士たちも笑い合っていたことを思い出した。

平穏な日常生活を送っていた我が家でも、昭和十八年ごろになると、食料品や日用品などにも少

しずつ戦争の影響が出てきて、不自由になってきた。主食や砂糖などが配給制になって、日本人の家で働いているボーイ（中国人男性のお手伝いさん）に配給される主食は、米でなく高粱コウリヤンとなった。しかし、一緒に食事をしているのに、ボーイだけに高粱飯を食べさせることもできないので、私たち家族と同じように米食を供していた。それだけに、母は米の入手に苦労していたようだった。配給された高粱は、小豆のようにして砂糖やハチミツを加え、お汁粉にして私たち子供のおやつとして食べさせてくれた。

日常の生活も次第に窮屈となってきた。昭和二十年の八月、五年生の夏休みに、以前からいろいろと険悪な空気を漂わしていたソ連軍が、遂に満ソ国境の数カ所から、戦車を先頭にして雪崩れ込んできた。ソ連軍の満州侵攻であった。

三 終戦前後の状況

「牡丹江も危険である」という判断で、避難命令が出された。父は、大事な歯科医療器具などを

以前から造ってあった床下の防空壕に入れ、齒科用の金などは少量なので持って逃げることにした。どのくらいの量があったのかは知らないが、避難道中には大変に貴重なものであった。私たち子供は、それぞれに学校の教科書や着替えなど、自分の物は自分で持つということでリュックサックに詰め込み、入らないものは急造の布の袋に入れて、両手で抱えて出発することになった。家は、入口はもちろんのこと、窓という窓も全部内外から板を打ちつけてしまった。これが最後になるなどということは夢にも考えず、しばらくの別れというような気持ちで家を出て、牡丹江の駅に向かった。既に、駅には同じようなかっこうをした日本人が大勢集まっていて、ごった返していた。しばらく待機しているうちに、ホームに避難列車が入ってきた。居留民会の役員の人からいろいろと話が あってから、それぞれに決められた車両に乗り込んだ。普通の客車であったが大勢の人たちが乗り込むので、座席に座ることも難しく、客車の通路

や連結器の上まで詰め込まれていた。一面坡に着くまでどんな風に行っていたか、はっきりした記憶はないが、混雑している列車内で、偶然に私の担任の寺尾先生に会ったことだけは覚えている。

先生は私の背負っているリュックサックを見て、「重たいでしょう！」と言われたので、私はリュックサックの中に詰めしてきたカバンや教科書のことを何気なく話したら、先生は「あなた！ 学校のカバンや教科書まで持ってきたの？ そんな物持って来なくてもいいのに」と言われて、ちよつとがっかりしたことを忘れない。

後になって聞いたことだが、私たちが牡丹江を出発してまもなくのこと、ソ連軍機による爆撃があつて、牡丹江駅で次の列車を待っていた大勢の人たちが亡くなったということだった。私たちは、間一髪で命拾いをしたことになる。

一面坡で列車を降りて叔父の家に行き、そこで再び牡丹江に戻る日まで過ごすことになった。叔父の家で二、三日過ごした八月十五日、あの終

戦の重大放送を聞くことになった。放送は雑音が多くて、肝心なところははっきりと聞きとれなかったが、叔父は「これは戦争をやめるといふ放送だ！」「日本は負けたのだ！」と言ったが、だれも本気でそれを信じようとはしなかった。しかし、現実としてはそれは間違いないことだった。その日から、地獄の日々が始まることとなった。

四 地獄の日々

私たちの家族は、両親と兄妹四人、それに私と妹二人の計九人家族で、兄は終戦前から牡丹江から少し離れた町で養豚業をしていた。牡丹江が危険だといううわさを聞いた兄は、すぐに私たちの安否を尋ねて牡丹江の我が家に帰ってきたが、既に家には板が打ちつけられて、だれもいない空き家になっていたのを知った兄は、「これは一面坡に避難したのだろう！」とすぐに思っ、一日遅れで一面坡の叔父の家に来た。ここで、無事に家族一同と合流することができた。

また、二人の姉は父の勧めで東京の歯科医の学

校に進学して二人で東京で生活していたが、一番上の姉は昭和二十年春に既に卒業していた。二番目の姉が在学中だったので牡丹江に戻らず東京にいたが、四月のB-29による東京大空襲で学校も全焼し、下宿先も焼け出されたので、しばらく山形の父の実家に身を寄せていて、一番下の叔父（父の八番目の弟）に牡丹江まで送ってもらっていた。

その叔父は、内地に行く最後の連絡船ということで、急いでその船の出航に間に合うように牡丹江を出発したが、もしその船に乗り遅れていたら、やはり叔父も満州に取り残されていただろうと、後に叔父とその話をする、「今思い出しても、ぞつと身震いがする」と言っていた。

いろいろと紆余曲折があったものの、我が家の家族は一応、一面坡で全員がそろって逃避生活をする事ができたが、その後のことはともかくもその時点では幸いというほかなかった。それから間もなく、一面坡の部落の人たちと行動を共にして避難行動を開始することになり、部落を出発し

た。

その際、私は早速悲しいことに巡り合ってしまった。叔父は一面坡で開業医をしていたし、叔母は旅館を経営していたので、今までは手伝いの人たちや下働きの満人たちがたくさん出入りをしていた。その日も、その人たちが馬車を何台も連れて家の前に止めていた。私は、てっきりどこかまで送ってくれるのだろうと思って好意的な目で見ていたが、家の中に入ってきて荷物積み下ろしなどをするようなそぶりは全然なく、馬車に乗ったまま、ただこちらを見ているだけだった。これはちよつとおかしいと思っているうちに、家を出ることになった。私たちが門を出てしばらく進むと、すぐに家の中に入って、残してあっためぼしい物をあさり始めた。

さすがに、叔父たちが家にいる間に入ることはためらっていたが、出て行くのを待っていたのだろう。いずれの民族でも、どこの国の人間でも、その立場が変わると人間性まで逆転してしまうの

だろう。昨日までお互いに信頼を基調にしていたのと思うと、私でさえも人の心のはかなさをつくづく感じたが、日ごろから接していた叔父や、叔母の心中を思うと誠に切ない思いだった。押し入ってきた物とりの満人たちにかまっている余裕もないので、その行動を横目で見ながら一面坡の駅に向かった。

一面坡から列車に乗りハルビンに到着した。国防会館の体育館が避難民収容所になっていて、私たちの一団もそこに収容された。その体育館は広い板敷きで、そこに備え付けられていた毛布を敷いて居場所を確保し、携行してきた荷物で各家族ごとの仕切りを作って我が家を囲った。一応、家族ごとにまとまって寝起きができるようになった。いっどうなるのか分からない毎日を、不安におびえながら過ごしていたが、ときどきソ連兵が巡回と称して体育館に入ってきて、「何かよい物はないか？」と探していた。特に腕時計を欲していて、自分の両腕に幾つものはめていながらそれでも

まだ足りないのか、「ダワイ！ ダワイ！」と、叫びながら探し回っていた。まるで獲物をねらう鷹のような目付きになっていて、見付けると飛んできて略奪していった。

ある日のこと、一人のソ連兵が肩にぶらさげているマンドリン銃をがたがたいわせながら入ってきたので、子供たちは逃げ回り最後にはトイレに入って隠れていたが、それを知ったソ連兵はトイレの中にまで入ってきて、私たちが両手で必死になつて押さえている戸をがたと揺さぶつた。必死になつて押さえて開かないので、とうとうガラス戸を割りそこから中をのぞき込んだが、どうしたのか、何もせずに黙って出て行った。後になつて聞いた話では、ソ連兵のねらいは男刈りだったようで隠れている男性は見付からずに、見えたのは子供だけだったので関心がなく黙って出て行ったのだらうと言われた。

ソ連兵が出て行って静かになつたのでトイレから出ると、「男はみんな連れて行かれた」と言っ

残った女性たちは呆然自失としていた。ところが、父と兄は幸いにもソ連兵に発見されることなく見逃されていた。父が病弱であつたので、みんなと同じ板の間に寝ていることは大変だろうと、周囲の人たちの好意で、その体育館の脇にあつた宿直室のようなところで畳の敷いてある小部屋に入っていたため、難を逃れたのだった。いつもの物とりのソ連兵がきたとばかり思っていた父と兄は、扉を閉め鍵を掛けて静かに床の中に入っていた。

ソ連兵は、一応その小部屋の前まできて扉をがたがたとゆすつていたが、鍵が掛かっていたので無人だと思つたのか、それ以上のことはせずに出て行ったそうだ。そのために父と兄は連行されなかつたが、連れて行かれた人たちには申し訳なかつたと繰り返し言っていた。それは致し方ないことであつた。

私たち收容されていた人たちは、何カ月もお風呂に入っていなかつたので、中国人の経営している風呂屋に行くことになつた。数人ずつのグルー

プに分かれて風呂屋に行くと、私たち子供を見て涙ぐんでいる人たちがいた。「どうしてですか」と聞くと、その人たちは満ソ国境に近いところの開拓団の人たちで、ここまで歩いて避難してきたとのことだった。山を越え野を横切り、裸になって河を渡るなど苦心惨憺たる思いをしてここまでたどり着いたが、途中で子供や老人を置きざりにしてきた。泣き叫ぶ子供を、自分の子供は他人に他人の子供は自分が、というようにお互いに取り替えて、持ってきた小銃や手榴弾で殺してきたということだった。私たちを見てそのことを思い出し、ってしまったのだろう。

三カ月ぐらいが過ぎたころだったと思うが、移動命令が出て新京（現在の長春）に向かうこととなり、有蓋貨車に乗せられて新京に着いた。貨車から降ろされて駅舎の外に出たら、日本人の子供たちが四、五十センチメートル四方の木箱にいろいろな駄菓子や並べ、それを首からぶら下げて歩き回っていた。「お菓子はいかがですか」と、声を

からしながら呼びかけて売り歩いてきた。店ではなく道端で、お客さんを求めて売っている日本人の子供のその有様に、驚くと共に「どうしてこんなことまでして！」と、いう疑問が心をよぎりました。昔読んだことのあるアンデルセンの「マツチ売りの少女」のことを思い出し、挿し絵になっていたその姿と、目の前にいる日本人の菓子売りの姿とが重なって頭に浮かび、哀れな思いに浸ってしまった。

一面坡、ハルビンそして新京へと避難行動を重ねてきた私たちのグループには、以前日本軍の家族が住んでいた陸軍官舎の一棟が与えられました。比較的広い家でその中の一室に一家族という具合に割り当てられて、どうにか雨露をしのぎ家族がまとまって寝起きすることができて、ほっとひと安心した。

官舎は、玄関から廊下がまっすぐに通っていて、その廊下を挟んで両側に畳敷きの部屋があり、その真ん中に階段があつて二階に上るようになって

いた。階段の反対側には、台所や風呂場があったように記憶している。私たち家族の部屋は二階の一室だったが、入口は閉め切ってしまい、家族だけに通じるノックの方法を決めていた。この家と同じような間取りの家が二、三十棟もあったような気がするが、今になるとはつきりした記憶がない。

この官舎街の外周には板塀を巡らしてあって、その中央に門があった。だがこの門はいつも開いているので、ソ連兵も自由に官舎街に入り込んできた。ソ連兵が入ってきたのを見付けた人はすぐに手近にある物をたたいたり、大声を出したりしてみんなに知らせるようにしていたので、その合図を聞いたらずぐに玄関の扉を締めて、声を出さずにひっそりとしていた。

ある日のこと、玄関口を締めることを忘れた我が棟に、ソ連兵が入ってきた。ソ連兵侵入を知らなかった兄が、用事を思い出して部屋から出ようとして部屋の戸を開けたらそこにソ連兵が立って

いたので、びっくりした兄は、とっさに戸を閉めてみんなで戸を押さえたが、ソ連兵は大男だったので力があり、戸をめりめりと音を立てながら壊して部屋に入ってきた。私たちは恐ろしくなって、全員で半べそをかきながら、「ウワー！」「ウワー！」とか、「キヤッ！」とかわけの分からない大声を出した。これからどうされることかと半分あきらめの境地でいたが、ソ連兵もびっくりしたのか、すぐに階段を駆け下りて逃げて行った。しばらくの間は一同放心状態となり、へたへたと座り込んでしまった。

そのころのソ連兵は、以前に悪事を働いて監獄に入っていた、いわゆる囚人兵が主力だったので、ちよつとやそつとのことではびっくりするようなことはなく、かえってむきになって押し入ってくるのが普通であったが、なぜ驚いてほうほうの体で逃げたのかという考えた。官舎街の向こう側にあった元陸軍の病院には、ソ連軍の憲兵隊の将校が居住していたので、その騒ぎが聞こえると

自分の身の安全も得られなくなり、場合によっては銃殺刑にされるかもしれないからだろうと
思った。ソ連軍は、満州、朝鮮に侵攻するに際しては、囚人部隊を先頭にしていたということが伝えられていた。

それからさらに数カ月が経ったころ、終戦後ソ連軍による男狩りによって連れ去られていた男性たちが戻ってきた。その姿たるや、空き缶などを腰にぶら下げて、着ている物も夏物で薄汚れていて、あちこち破れたままの格好で、見るも哀れな姿であった。医者をしていた父のすぐ下の弟も戻ってきたが、以前は太っていて人並みはずれた良い体格だったが、数カ月間引つ張り回されていた間にやせ細ってしまい、戻ってきたときの姿は、本当にこれがあの叔父なのか、と一瞬疑ってしまいうくらい変わっていた。もともと叔父ばかりでなく、戻ってきた人は全員、骨と皮ばかりになっていた。もう一人の叔父もその後に戻ってきたが、その叔父は私も聞いたことのないようなソ連との

国境に近い所に住んでいたが、終戦となってその町から避難を開始し、松花江を船で渡ったが、その際、三隻の船が一緒に河を下ったが、そのうちの一隻に中国人の反乱兵が乗っていて、松花江の中程にきたところで、乗っていた日本人をみんな河に突き落としたうえに銃で撃つたので、ほとんどの人がそこで殺されてしまったことだった。叔父の家族も同じ運命であったことを話してくれた。叔父は泳ぎが得意だったので、すぐに河底の方に一旦沈んで、それから泳ぎ始め、息をつくときだけ水面に顔を出し、死人のようなふりをして再び潜って、河底に近いところを泳いで下流の河岸に着いて助かったのだった。そのとき松花江では何百人の人が死んだのか、正確な数ははっきりしないということで、助かった人は叔父のほかに一、二人ぐらいではないかとのことだった。

その叔父も我が家族の一員に加わったので、心強くもなり、また賑やかにもなった。避難生活は経済面でも大変に苦しいことだったが、両

親は私たち子供には仕事をさせることはなかった。父が牡丹江を出るときに持っていた「金」を売りに、ときどき叔父と一緒にどこかに行っては生活費を作っていたようだった。

ある日のこと、いつも父の売買の相手役だった中国人が、「もっと高く売れる所を案内する」と言っただけで、父と叔父を連れ出したが、何やかやと言いながらだんだんと妙な所に連れて行ったので、父と叔父は「もういいから」と断って戻ってきたと話したが、大分危険なことだったらしい。そのまま欲につられて行って行ったら、二人共持っている金を奪われ、場合によっては命もとられたかもしれないという話を後に聞いたことがあった。家族が飢えることなく何とか生活をしていた裏には、父は父なりに随分と大変な思いをしていたのだった。

いつまでもこんな状態が続くのか、先行きの見通しが立たないので、何か商売でもして生活資金を稼ぐこととなり、新京の市場の一角でお菓子屋

を始めた。母と一番上の姉が仕入れてきて、急ごしらえの屋台に並べて売っていた。当初は比較的順調に売れ、これでひとまず安心と一同で喜んでいたが、ある日仕入れに行った母と姉が、あたふたとして戻ってきた。どうしたのかと心配になつて二人を見たら、仕入れ用のリュックサックに米がいっぱい詰められていた。お菓子を仕入れに行つたのに、お米を担いで戻って来るなど思いもよらないことなので、「どうしたの？」と母に尋ねると、仕入れに行く途中の道で人だかりがしているの、何となくそこを覗いたら日本軍の残していった米や衣料品が山積みされていて、通りかかった人たちが思い思いにそれを持ち去っていたので、二人も一緒になつて空っぽのリュックサックに一生懸命に詰め込んで、捕まらないようにしてあたふたと戻ってきたとのことだった。

そのころには、新京の市内では中共八路軍と国民党軍が対峙していて、押されたり押し返したりして不安定な治安状況だったが、そのどちらかが

一時的に後退し、相手もまだ進出して来ない空白の状態になっていたために、日本軍の残置した食糧品も置きっぱなしになっていたらしい。母や姉も、元々は日本の物だという気持ちから遠慮する必要もないとばかりに持ってきたのだそうだ。米が手に入ったのは随分と助かることだったが、我が家だけのことであり、共同炊事場で米を研いだり炊飯したりすることも気がひけるので、他人がいない時間を見計らって炊事をしなければならず、それなりに苦心したものだ。米のご飯が食べられることは嬉しかったが、気苦労も大変なことだった。一面坡から一緒に避難してきたグループの全員に分配するには到底足りないもので、結果的には我が家族だけで食べることにした。だが、ここそと食べるようで、おいしさは半減していた。

新京にも冬がやってきた。寒さが加わってくると、栄養失調から伝染病が蔓延してきて、ジフテリアや発疹チフス、それに回帰熱などで死んでいく人が続出してきた。医者である叔父も、どうに

かして病人を助けたいと心を砕いて、患者を見て回っていたが、薬も手に入らずに全くのお手挙げの状態となっていた。

昭和二十年の真冬を過ごしているうちに、新京市内にいた日本人も死亡したり南に下ったりして、大分少なくなっていた。我が家は、みんなの努力によって何とか死人を出すこともなく、この冬をどうにか乗り切っているうちに春を迎えた。

五 引揚げの希望に向かって

昭和二十一年の夏が近づいたころになると、避難民の間に、近いうちに日本に帰れるかもしれない、という希望に満ちたうわさ話が流れてきた。その話を聞くと家族も急に元氣づいてきたが、実際にはそのうわさ話の真偽は不明で出所も明らかでなく、がっかりさせられた。だが、「火の無い所に煙は立たず」で、いつ移動命令が出るのか分からないながら、希望を捨てることができずに、首を長くして待ち続ける毎日となった。

そのうちに、引揚げもうわさからだんだんと現

実味を帯びてきて、真夏になったころには引揚命令が一面坡グループにも伝えられてきた。「いよいよ引揚げだ！」と急に元気が湧いてきた。持ち帰れる荷物のこと、携行するお金のこと、その他引揚げについての諸注意事項が説明されて、引揚者名簿に名前が書かれてほっと安心した。やっと引揚げということが現実のこととなった。新京を出発する前の晩は、家族一同もなかなか寝付かれなかった。

新京駅から貨物列車に乗せられて、着いた所は錦州だった。日本に向かう引揚船の出る所は錦州から少し南に下った所の葫蘆島コロムドだった。錦州では、引揚船に乗るまでの順番待ちで、数日間を収容所になっていた倉庫のコンクリートの上で過ごすことになった。真冬の寒さの厳しい時期だったら、ここまでやっとのことではどり着いた人でも、相当の死者が出たことと思っただが、私たちは幸いにも夏だったので、引き揚げる喜びの方が強く、コンクリートの上の生活も苦にならなかった。

順番がきて、やっと葫蘆島に移動することとなり、錦州から再び貨物列車に乗せられたが、今度は床だけしかない無蓋貨車だった。荷物を貨車の中央部に並べて、それを囲むようにして人々が座った。貨車の端の方に座った人は、振り落とされないようにお互いに手と手を固く握りしめて、転落防止に懸命だった。幸いなことに、私たちの乗った貨物列車では転落事故は起きなかったが、他の貨物列車では止まったり動いたりしているうちに、その衝撃で振り落とされた老人がいたということだった。ここまで避難してきて、もう少しで引揚船に乗れるというのに全くむごいことで、亡くなった人もさぞ残念無念だったことだろうと思っただ。

貨物列車は、止まったり動いたりの動作を繰り返していた。ときにはいつ動くのかと心配になるくらい長い時間止まったままのこともあった。列車が止まると、それを待っていたかのように現地の中国人がどこからともなく集まってきて、荷物

を引きずり落としたり、自在鉤のような物でリュックサックを引っ掛けて落としたりして略奪していったので、子供心にも恐ろしくなってきた。

もう一つ困ったことは女性の生理的な処理だった。列車が動いているときは我慢に努めていたが、止まるとそれがどのぐらいの時間止まっているのか確かめようもないままに、すぐに飛び降りて用を足しそこそこに貨車に戻った。ある所で列車が急に止まったので、それまで我慢をしていた姉が飛び降りて材木が積んであったかげで用を済ませていざ戻ろうとしたとき、それを見付けた中国人が走り寄ってきて、持っていた鉄棒で腰の辺りをたたかれたとのことで、腰を押さえながら足を引くようにして戻ってきて引き上げられたが、そのときの心配したことは忘れることができない。やっとのことで葫蘆島に着いて、いよいよ乗船となった。引揚船は中型の貨物船で、上甲板から階段をいくつも降りて船倉に行った。船倉は上、中、下の三段階に仕切られていて、かつてどこか

で見た記憶のある蚕棚のような感じだった。私たちのグループが、どの段に入れられたかは忘れてしまったが、雨が降ると船倉の方に雨水が流れ込むので、甲板の扉を閉めてしまった。そうなる船倉のなかは暗く蒸し蒸しとなり、まるで蒸し風呂に入ったようになり、随分と苦しかったことを鮮明に覚えているが、船中生活が何日だったかは思い出せない。

人々の喚声が聞こえてきたので、みんなで甲板に出てみると、日本の山々が遥かに眺められた。みんなは興奮して口々にわめいていた。船は静かに入江に入って、一番奥の岸壁に横付けになった。そこは舞鶴港であった。

数日前までの中国大陸での景色とは全く異なる風景であった。大人の人たちは忘れかけていた日本の空気と、幼いときの日々を思い出して感激に涙ぐんでいたが、私は生まれて初めて接する日本の景色だった。日本本土に到着した感激に浸っていた引揚者は、すぐに現実の世界に引き戻されて

しまった。船内で防疫関係のいろいろな検査が行われたが、それは一番心配していたコレラ、チフスなど伝染病の保菌者がいないかどうかの検査だった。私たちも、これを一番心配していた。

検査結果が分かるまで数日船内で留められているときに、京都に住んでいる親類の者が面会にきてくれたが、これには家族一同びつくりした。どうして舞鶴に入港していることが分かったのか不思議に思っていたら、二番目の姉がそこに手紙を出していたらしい。面会といってももちろんこの船に乗ることは許されず、岸壁から連絡用の小舟に乗って引揚船に近づき、下から大声で面会を求め、私たちは甲板の上からお互いに顔を合わせて、大声で話し合う形であった。それでも、思いもよらない劇的な面会であった。それに、お土産として蒸かしたさつま芋を持ってきたので、甲板から籠をつけたロープを降ろして、籠に入れてもらい引き上げた。その光景も舞鶴港での思い出として今だに忘れられないことである。

数日すると検査の結果が分かったが、一番恐れていたことが現実のこととなった。それは、疑似コレラの保菌者が発見されたのだった。その人はすぐに船から降ろされて隔離病院に収容され、異常のなかった者は船に乗ったまま佐世保港に移動した。翌日、佐世保港外に停泊したが、佐世保港には保菌者の出た引揚船が何隻も錨を下ろして停泊していた。

一週間毎に検査があつて、その都度保菌者が出ると、その人は上陸して隔離されるが、健康な人はいつまでも上陸させてもらえなかった。

結局、四週間以上もこの暑い船の中で過ごす結果となつてしまった。後で聞いた話では、疑似コレラの保菌者として隔離された人でも、再検査の結果、なんでもなかった人はすぐに帰郷することが許されたということで、異常がなく船に最後まで残された私たちは、「正直者が馬鹿をみる」の類だった。

船内で留められている間にも、栄養失調とか疲

労とかで衰弱した人が次から次と亡くなり、その都度その遺体を水葬にした。そのときは、船内に「ボー！　ボー！」という汽笛が悲しげに鳴り響き、私たちも手を合わせたものだった。「また亡くなったのね！」と、話し合い、せつかく苦勞してここまでたどり着いたのに、懐かしの故郷の土を踏むことなく、どんなに無念なことだったろうかと思ひ、悲しくなってきた。

船中での食事は、海藻がたくさん入った雑炊が主で、米粒などはどこにあるのか探すのに苦心するような食事だったので、元氣だった人でもだんだんと弱っていった。病弱だった父には、病人用の特別食として白米のお粥に梅干が半分ついてた。しかし、その梅干も毎日ではなく、一日か二日置きであった。半分に割った梅干も種のついている方が来ると、「ラッキー！」と叫んだものである。父は、その種をいつまでも口の中に入れてなめていたが、ある日兄がその種を割って中の実を食べてしまったので、母は「お父さんの大事な梅

干の種を食べてしまつて！」と言つて、兄に大目玉をくわしていた。今では、梅干の種の実を食べる人は特別の人のほかにはあまりいないと思うが、当時それは本当のことで、今でも梅干を見ると思ひ出して一人で苦笑いをする。

六 故郷へ！　そして生活再建

いよいよ防疫問題も解決し、天下晴れて上陸する日がきた。だが、まだ防疫とは縁が切れずに、佐世保に上陸するとすぐに、その場で頭から足の先まで体中をDDTの白い粉をかけられて、そのうえさらに徹底した身体検査もあった。父は、着ていた背広の中に縫い込んであった金を見付けられないかと、そればかりを心配して、ひやひやそわそわしていたが、幸いに無事にその関門を通過して、今度こそ間違いなく故郷山形に帰ることができる、家族で手を取り合つて喜んだ。

佐世保から二百人ぐらいが乗った連絡船で大村湾に入つて、南風崎に上陸し、そこから引揚列車に乗車した。列車は客車であつたが、座席はもち

ろんのこと通路にも新聞紙などを敷いて座り込むほどの、満員すし詰め列車だった。停車駅での乗り降りも窓からで、新京から錦州、葫蘆島へと乗った避難列車を思い出すほど大変だった。やっとなこと、吹浦駅にたどり着いた。

今考えてみると、終戦後数年間の列車事情はそのような状態で当たり前のことであつたが、それでも車中では飲まず食わずで、大変な苦勞だった。

私たちは、とりあえず戦時中に姉を満州へ送ってくれた叔父の家に世話になることとなった。病院を開業していた叔父一家は一階の一室で寝起きし、私たち家族は二階の二間に落ち着いた。その結果、一階の廊下が医院としての診療室になった。父は体が弱っていたので、しばらく療養をすることとなり、一番上の姉が歯科医の資格を持っていたので、開業することができた。その後一年ぐらい療養した父も元気をとり戻し、一家の生活を支えることとなった。

姉のハルビン女学校時代の同級生のお兄さんが、

ソ連抑留から戻ってきて九州にいたが、姉との結婚を望んで我が家を訪れた。だが、父は自分の健康にまだ不安があつたので、この話には反対だったが、その人が「一番下の妹の面倒は私が見るから」と言つたので、姉はその人と結婚し、九州に行つてしまつた。

次の姉は北海道へ嫁ぎ、その下の二人の姉は共に叔父のもとに養女になり、妹は九州に嫁いだ長姉が大阪に移転したので、高校を出るとすぐに姉の所に行つてしまい、姉妹六人はばらばらになつてしまつた。

私は、高卒後村役場に勤め、姉たちがお産といえは南に北に手伝いに馳せ参じていたが、昭和三十一年に良縁があつて結婚した。

終戦から引き揚げるまでの数々の苦勞話は、なかにし礼さんの本や以前TVで放映された板東英二さんの「グレートマザー物語」などでの、九死に一生を経験した方たちの苦勞を思えば、私などはまだ苦勞の足りない方かもしれないが、その場

その場を頑張つて乗り切ったので現在の幸福があるのだらうと、感謝する毎日です。

平成元（一九八九）年には主人も他界し、息子の代になり細々ながら商売を続けているが、孫が小学校六年生の時に書いた作文で、「僕は金物店の六代目を継ぎます」というのを読んで嬉しくなり、必ず実現するように祈っている毎日でもあります。

世界のどこかで戦争が続いていることをTVや新聞で知るたびに、何故に殺し合わなければならぬのか？ 孫たちの時代にはどうなるのかと考えると、胸が痛んで仕方がないこのごろです。

早く世界中が平和になりますことを祈らずにはおられません。

私と妻の労苦記録

福島県 加藤 清

まえがき

私加藤清も妻芳子（旧姓渡辺）も、共に福島県の貧しい農家の生まれで、それぞれの両親が家族を引き連れ、満州開拓団員として渡満したことから人生が狂い、言うに言われぬ労苦を背負う運命となった。

当時貧しい農家には「満州に行けば土地がたくさんもらえる。こんなに狭い福島の本奥にいるより、広い広い大陸に渡って開拓に精を出す方が生きがいがある」という夢があった。もちろん渡満するということは一大決心のいることだったが、反面夢の膨らむことでもあった。だがその結果は、大人たちはもとよりその家族にとっても大変な苦労となるうとは、夢にも思わぬことだった。